グリムの語り手たちとそのレパートリー

第1部

小　澤　俊　夫

グリム兄弟のメルヒェン集（Kinder-und Hausmärchen，以下 KHM と略す）については，1970年代にはいってから，西ドイツのハインツ・レレケ Heinz Rölleke の研究によって，新資料が発見されたり，資料の正確な検討によって従来の定説が修正されたりしはじめた。従来の，ややもすればロマンティックな解釈やグリム観が，より事実に即した，客観的なものになりつつあるのは喜ぶべきことである。グリム兄弟およびそのメルヒェンについての研究は，今はじめて学問としての客観性を獲得しつつあるとさえいえるであろう。

レレケの研究によって，KHM の個々の話の語り手が，かなりの部分にわたって特定されるようになった[1]。そこで，本稿では，つぎのような問題を検討してみることにする。

それぞれの語り手がどの話を語ったかを整理する。その際，グリム兄弟は，ある語り手の語ったものを，のちに他の語り手の話によって補ったり，合成したりしているので，その手続きも，可能な限り明らかにする。また話の主人公と，話の結末は，語り手の好みとも関係するので同時に調べる。

グリムの語り手たちには，幾組かの姉妹がいるので，その家庭の系譜を可能な限り明らかにする。

以上がここで扱う問題である。語り手たちの話の文芸的特徴の分析がつぎにこなければならないのは当然であるが，それについては，兄弟が版を改めるたびに手入れしてきた事実があるので，版による稿の変化の問題とからみあっており，第7版（1857年版）によってその問題を論ずることはできない。従って，それは別の機会に扱いたい。

本稿はまず KHM 第1巻の語り手たちを扱い，以下の章立てによって進める。

第1章　ヴィルト家（Wild）の人たち

　第1節　ドルトヒェン（Henriette Dorothea）

第2節　グレートヒェン (Margarete Marianne)
第3節　リゼッテ (Johanna Elisabeth)
第4節　ミー (Marie Elisabeth)
第5節　ヴィルト夫人 (Dorothea Catharina)
第6節　ヴィルト家の誰かから寄せられた話
第2章　ハッセンプフルーク家の人びと
第1節　マリー (Marie)
第2節　ジャネット (Johanna Isabella)
第3節　アマーリエ (Amalie)
第4節　ハッセンプフルーク家の誰かから寄せられた話

第1章　ヴィルト家の人たち

父はスイスのベルン出身の薬剤師ルードルフ (1747～1814) で，この一家は，カッセル市のマルクト通りで「太陽薬局」Apotheke zur Sonne を営んでいた。その隣りに，グリム一家が，1805年以来，すなわち，ヤーコプ Jacob がパリで恩師ザヴィニーの助手をつとめている間に，母がヴィルヘルム Wilhelm 以外の子どもたちを連れて，シュタイナウ Steinau から移住してきて以来，住むようになったのである。父ルードルフは，カッセル Kassel に移住してきてから，そこでドロテーア・カタリーナ・フーバー Dorothea Catharina Huber (1752～1813) と結婚したのである。ドロテーアの父はスイスのバーゼル出身で，母は，ゲッティンゲン大学の文献学の教授ヨーハン・マティーアス・ゲスナー Johann Mathias Gesner の娘だった。ヴイルト家の人たち全体で，第1巻の初版のうち，少くとも28話は語っている。それらは，グリムの注釈書では例外なく“ヘッセン”と記されている。この家の人の語りの聞き書きは，ほとんど，ヴィルヘルム・グリムの手でおこなわれた。彼はのちに，1825年になって，この家の娘で語り手であったドルトヒェンと結婚したのである。

第1節　ドルトヒエン　1793年5月23日カッセル生れ，1825年ヴィルヘルム・グリムと結婚，1867年8月22日没。

1810：44番「煙突掃除夫のふたりの息子」„Die Zwei Schornsteinfegers Jungen"（ヴィルヘルム記録）ふたりの息子が金の卵をみつける。鳥を焼く見はりをしているうちに，ふたりで鳥の心臓と肝臓を食べる。心臓を食べた者は皇帝になり，肝臓を食べた者は毎朝まくらの下に金の財布をみつけることになる

だろうという。見はりを命じた金細工師は，食べられたことを知ると怒り，妹を嫁にしてやらないという。ここまでの断片である。主人公は男の子。相手は金細工師。

この話は1812年の初版には60番として，「金の卵」の題名で採用されたが，1819年版では注の中に「断片」として入れられ，60番には，ハクストハウゼン家 Haxthausen から寄せられたパーデルボルン地方の話が採用された。それには一部に「ヘッセンのシュヴァルム地方 Schwalmgegend から」という話が加えられている。これはトライザ Treysa のフェルディナント・ジーベルト Ferdinand Siebert から寄せられたものである。

1810：35番「ねずみ皮の王女」„Prinzessin Mäusehaut"（?）父王が三人娘に，自分をどれ程愛しているかたずねる。長女は王国全部よりも，と答え，次女は宝石よりも，と答る。末娘は塩よりも，と答えたので追放される。のちに別の国の王の妃となり，父王を招いて無塩のごちそうを食べさせて，昔のことを思いださせる。主人公は娘。話は中断されていないし，すじのなかで必要なことはよく語られているが，メモの感は免れない。1812年版，71番同名，文章には多少手が入れられてある。1819年版ではこれも消える。そして71番には全く別の話「六人が世界をのし歩く」„Sechse kommen durch die ganze Welt" が入る。これはドロテーア・フィーマン Dorothea Viehmann が語ったものである。主人公は王女。結婚。

1812：13番「森の三人のこびと」„Die drei Männlein im Walde 本人使用本にはこれを，同じドルトヒエンが1812年10月9日に語ってくれた類話で補っている。1819年からは，ドロテーア・フィーマンの話とアマーリエ・ハッセンプフルークが寄せてくれた話によって大幅に手入れしている。主人公は男のこびと。

1812：24番「ホレ婆さん」„Frau Holle" 1811年10月13日，カッセルで語る。1819年版からは，ハノーファーHannover のゴールトマン Georg August Friedrich Goldmann から寄せられた話のいくつかのモティーフ（にわとりによる歓迎）と結合された。主人公はまま娘。ホレにより幸せを獲得。

1812：28番「歌うがい骨」„Der singende Knochen" 1812年1月19日，ドルトヒェンが「ネンタースハウゼンのあずまやのだんらの脇で」語ったものを，のちに彼女の夫となるヴィルヘルムが記録した。1819年版からは兄弟の数が3人でなくふたりとなっている。主人公は若者（兄）。弟殺し露見。

1812：34番「ハンスのトリーネ」„Hansens Trine" 1811年9月29日，カッ

セルで語った。しかし1819年版からは，ドロテーア・フィーマンが語ったと思われる「かしこいエルゼ」“Die kluge Else”が34番となる。主人公は若い妻。なまけ者で破滅。

1812：36番Ⅱ「テーブルよ食事の用意，金ひりろば，こん棒よ袋から出てこい」„Tischleindeckdich, Goldesel und Knüppel aus dem Sack” 1811年10月1日，カッセルで語る。のちの版では注釈で梗概が示されるだけ。1812年版で36Ⅰとされていた話はジャネット・ハッセンプフルークがカッセルで語ったものが基になっており，のちの版ではそれが36番となっている。主人公は若者。冒険譚。

1812：39番Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，「こびとたち」„Die Wichtelmänner” 3話ともドルトヒェンが語ったもので，1812年版では話に独立の題名がついていた。「こびとに仕事をてつだってもらったくつ屋さん」「こびとの名付親になってくれた女中さん」「こびとに子どもをとりかえられた母親」。1857年版まで保持される。主人公はこびと。相手，Ⅰくつ屋，Ⅱ女中，Ⅲ若い妻。

1812：46番「フィッチャー鳥」„Fitchers Vogel” ドルトヒェンの語ったものとフリーデリケ・マンネルのそれとの合成。1857年版まで保持される。主人公は娘，敵対者は魔法使いで盗賊。

1812：49番「六羽の白鳥」„Die sechs Schwäne” 1812年1月19日，カッセルで語ったもの。この話は，1801年にブラウンシュヴァイク Braunschweig で出版された「妖精のメルヒェン」“Feen-Mährchen” の16番「七羽の白鳥」“Die sieben Schwäne” の影響を，少くとも間接的に受けている。この話は1857年版まで保持されている。主人公は6人の兄と妹。敵対者は魔女であるまま母。

1812：55番「ルンペルシュティルツヒェン」„Rumpelstilzchen” ヤーコプは1808年に「ルンペンシュテュンツヒェン」„Rumpenstünzchen” という題の自筆の聞き書きをザヴィニーに送付している。1810年，ブレンターノに送ったときには42番に位置づけられていて，内容はすこし変更されている。それが誰の語りによるかは不明であるが，1812年版には，1811年3月10日にカッセルでドルトヒェンが語ったものと，多分ハッセンプフルーク家の誰かが語ったものとの合成の話が，55番として位置づけられた。絡結部の劇的な終り方は，リゼッテ・ヴイルトの語りによって，第2版（1819年）からつけ加えられた。1857年版まで保持されている。「ルンペルシュティルツヒェン」という名は，1582年にアウグスブルク Augsburg で出版されたヨーハン・フィッシャルト Johann Fichart の「グルガンチュア」„Gargantua” に由来する。主人公は娘，援助

者兼課題提出者はこびと。

1812：56番「いとしいローラント」„Der liebste Roland" 1812年1月16日，カッセルで語った。1857年版まで保持されている。主人公はまま娘と恋人ローラント。呪的逃走。結婚。

1812：65番「千まい皮」„Allerleirauh" 1810年にブレンターノに送った手稿には，7番に „Allerlei Rauch" というのがあり，これはヤーコプが多分1807年末にカッセルで，カール・ネアリヒ Karl Nehrlich の小説「シリー」"Schilly" の第1巻（1798年イエナ Jena）からとったものであった。ところが1812年版に際しては，1812年10月9日にドルトヒエンがカッセルで語ったものが，65番に位置づけられ，1857年版まで保持された。細部は「シリー」をとり入れている。主人公は王女。父からの求婚。指輪・糸まきによる発見。王との結婚。

1812：76番「なでしこ」„Die Nelke" この話は1812年9月29日にカッセルのハッセンプフルーク家の人が語ったものだが1819年版では，ドロテーア・フィーマンが語った話にとりかえられている。しかし，1812年版のグリム兄弟の本人使用本には，ドルトヒェンの名が記されているので，彼女も部分的には，何かを語ったものと思われる。

1815：2番「うたいおどるひばり」„Das singende, springende Löwenekkerchen" 1819年版以降は通し番号の88番として，1857年版まで保持された。この話の主要部分は，1813年1月7日，カッセルでドルトヒェンによってヴィルヘルムに語られたのである。いくつかの部分はトライザ Treysa のフェルディナント・ジーベルトが語った話「夏冬の庭の話」"Von dem Sommer-und Wintergarten" による。それは，1812年版に68番として位置づけられていた話である。88番の話の終結部は，多分1807年にグレートヒェン・ヴィルトによってもたらされた「白鳥王子」"Prinz Schwan" の類話から来ている。主人公は末娘。王子が光により，はとに変身。探索行。再発見して結婚。

1815：16番「みそさざいとくま」"Der Zaunkönig und der Bär" この話は1813年6月19日にドロテーア・フィーマンが語ったものだが，1815年版のグリム兄弟の本人使用本には，ドルトヒェンの名と1813年1月10日という日付が記されているので，ドルトヒェンからも聞いたものと思われる。

1815：19番「ひきがえるの話」"Mährchen von der Unke" 第1話は1813年1月5日にドルトヒェンが語った話と1813年3月11日にその妹リゼッテ・ヴィルトが語った話との合成であった。第2話と第3話の由来は不明。主人公

は，第1話は子ども。死。第2話はみなし子の女の子，第3話は子ども。相手はひきがえる。

ドルトヒェンのひとり息子ヘルマン・グリム Hermann の記すところによれば，母ドルトヒエンはつねにヘッセンの方言をしやべっていたということである。

第2節　グレートヒェン

1787年4月11日カッセル生れ，1810年 von Schmerfeld と結婚。しかし1819年1月9日にはすでに没している。彼女からの聞き書きはすべてヴィルヘルムによっておこなわれている。1812年版のグリム兄弟の本人使用本に記されている話は以下の如く，1808年までのもので，1810年に結婚してからはグリム兄弟に何も語らなかったものと思われる。1809年9月24日付，ヤーコプからヴィルヘルムへの手紙に，つぎのような一節がある。「グレートヒェンはどうしようもないよ。彼女は亭主のことしか頭にないんだから。それに，たいていの女性と同じように，書きまちがいをするのをとてもおそれてるんだ。」第1巻にしかその話はないことになる。

1810：2番「ねことねずみのこと」„Vom Kätzchen und Maüschen” グレートヒェンが口伝えに聞いたものを1808年，カッセルでヴィルヘルムに語った。1857年版まで保持されている。主人公はねことねずみ。しまいにねずみがねこに食べられる。

1810：4番「まごころのある名付親すずめ」„Der getreue Gevatter Sperling” 1808年ヴィルヘルムがグレートヒエンからカッセルで聞き書きした。1812年版にも58番として採録。1819年版以降導入部は注釈に入り，本文は大部分ドロテーア・フィーマンの語りによって構成され，1857年版まで保持されている。主人公はすずめ。人間に対して犬の仇討ちをする。

1810：16番「白いはと」“Die weiße Taube” 筆跡ヴィルヘルム。1808年にグレートヒエンが語ったもの。1812版では64番「おろか者のこと」„Von dem Dummling” のⅠとして収められている。1819年版からは64番には，ハッセンプフルーク家の誰かが語った話（1812年には64番のⅢだったもの）が独立して入り，「白いはと」は削除された。

1810：30番「盗まれたお金」„Von dem gestohlenen Heller” この話は1808年にグレートヒェンからヴィルヘルムが聞き書きしたが，1810年には手違いでブレンターノに送付されなかったか，ブレンターノの手許でなくなったかし

て，ブレンターノの遺品のなかからは発見されなかった。1812年版では7番同名。しかし，1819年版から7番には，ハクストハウゼン家から寄せられた「よい商い」"Der gute Handel"が入り，これは削除された。死んだ子が現れる。

1810：34番「マリアの子」"Marienkind" 1807年，ヴィルヘルムがグレートヒェンの語りを聞き書きした。1812年版には3番として入り，以後1857年版まで同番号で保持されている。

1810：45番「白鳥王子」„Prinz Schwan" この話は1807年にグレートヒエンの話によってヴィルヘルムが記録した。1812年版では59番として採録されたが，1815年第2巻の41番「鉄のストーブ」„Der Eisenofen" の類話と考えられ，1819年版から削除された。主人公は娘と呪われた王。探索行。結婚(1812)。

1812：4番「ボーリングとトランプ遊び」„Gut Kegel-und Kartenspiel" グリム兄弟の本人使用本のメモによれば，これはグレートヒェンから1808年にもたらされたものであるが，ねこのエピソードとボーリング，魔法のベットがあるだけで，こわさを習いにいくモティーフはない。主人公は若者。求婚者テストのきも試し。1819年版からは「こわさを習いにでかけた若者の話」„Märchen von einem, der auszog, das Fürchten zu lernen" が4番の位置を占め，そのまま1857年版まで保持されている。それは1813年にトライザのフェルディナント・ジーベルトが「シュヴァルム地方で」として送ってきたものである。

1812．16番「たちまちさん」„Herr Fix und Fertig" この話はホーフ Hof の老曹長クラウゼ Krause から寄せられたものだが，1812年版の本人使用本に，グレートヒエンの名がメモされている。1819年版からは，「三枚のへびの葉」„Die drei Schlangenblätter" がこの位置に入り，「たちまちさん」は，62番の注に入った。主人公は兵隊あがりの男。

1812：30番「しらみとのみ」„Laüschen und Flöhchen" この話は1808年にヴィルト家の母親ドロテーア・カタリーナ Dorothea Catharina が語り，ヴィルヘルムが聞き書きした。それは1810年にブレンターノに送られた手稿の3番に入れられていた。そして1857年版に至るまで保持されているが，1812年版のグリム兄弟の本人使用本にはグレートヒエンの名のメモがある。主人公はしらみとのみ。

1812：34番「ハンスのトリーネ」„Hansens Trine" この話はドルトヒェンが1811年9月29日に語ったものだが，1812年版の本人使用本には，グレートヒェンの名のメモがあるので，彼女も知っていたか，語ったものと思われる。い

ずれにせよこの話は，第2版で，ドロテーア・フィーマンの語った「かしこいエルゼ」„Die kluge Else" にとってかわられた。

第3節　リゼッテ

1782年7月11日カッセル生れ，1809年フォン・エシュヴェーゲ von Eschwege と結婚。1858年8月30日没。彼女が話を提供したのは1810年以降である。

1812：41番「コルベスさん」"Herr Korbes" この話は1810年11月に，ジャネット・ハッセンプフルーク Jeanette Hassenpflug が自筆で書きとめて送ってくれたもので，1810年にブレンターノに追加して送られた。「ぼくの赤い車輪をよごさないように，……」の詩形のことばの類話だけ，1813年にヴィルヘルムがリゼッテから聞き書きしたのである。これはグリムによる注に収められている。

1812：55番「ルンペルシュティルツヒェン」„Rumpelstilzchen" この話は上述の如く，ドルトヒェンの話とハッセンプフルーク家の人の話の合成だが，1819年の第2版において，リゼッテによる劇的な終り方がつけ加えられたのである。

1815：19番「ひきがえるの話」„Mährchen von der Unke" このうち第1話が，ドルトヒェンの項で述べた如く，1813年3月11日にドルトヒエンとリゼッテが語った話の合成である。

第4節　ミー

1794年12月6日カッセル生れ。1812年 Robert と結婚。1867年3月3日没。彼女は1810年以降になって話を寄せた。

1812：44番「死に神の名付親」"Der Gevatter Tod" 1811年10月20日カッセルでこの話を語った。ただし終結部のモティーフは，1819年版においてはじめて，フリードリヒ・グスターフ・シリング Friedrich Gustav Schilling の「新しい夕べの仲間たち」"Neue Abendgenossen"（1811年）のなかのある物語からとって入れられた。主人公は12人の子持ちの年とった男。死に神から医術を学ぶが，結局死に神に負ける。

第5節　ヴィルト夫人

1752年5月9日カッセル生れ，旧姓フーバー Huber。1813年9月20日没。

1810：3番「しらみとのみ」„Das Laüschen und Flöhchen" 1808年，ヴ

ィルト夫人が語り，ヴィルヘルムが聞き書きした。1812年版では30番で同名。以後1857年版まで同番号で保持されている。

1810：5番「わらと炭と豆の話」„Von dem Strohhälmchen, dem Köhlchen und dem Böhnchen" 1808年ヴィルト夫人によって寄せられ，ヴィルヘルムが聞き書きした。1812年版では18番。以後1857年版まで同番号で保持されている。第3版（1837年）以来，ブルクハルト・ヴアルディス Burkhard Waldis（1548年）の「イソップ」„Esopus" にのっとって書き改められているが，ヴィルヘルムは「カッセルより」という出所説明を変更していない。

1812：19番「漁師とその妻」„Von dem Fischer un syner Fru" この話は画家フィリップ・オットー・ルンゲ Philipp Otto Runge がポンメルン地方の方言で記録して送ってきたものだが，1812年以前にヴィルト夫人もカッセルで語っており，それは注釈の中に，「ヘッセンより」として収められている。

1812：47番「ねずの木の話」„Von dem Machandelboom" この話もオットー・ルンゲの方言による記録であるが，1812年版のグリム兄弟の本人使用本には，ヴィルト夫人の名がメモとして記されている。

第6節　ヴィルト家の誰かから寄せられた話

1810：11番「兄と妹」"Das Brüderchen und das Schwesterchen" この話はヴィルヘルムが，ヴィルト家の誰かから聞き書きした。1812年版からは15番「ヘンゼルとグレーテル」"Hänsel und Gretel" となり，1857版まで保持されている。「風だよ，風だよ，天の子だよ」という子どもの返事は，1813年1月15日にドルトヒェンが寄せたものである。従って1819年版から挿入された。グリム兄弟自身による注釈書の中で，「ケーキの家は，シュテーバーのエルザスの民衆本，102 ページ」とだけ記されているが，ハインツ・レレケは，1842年に出版されたシュテーバーの本は第5版（1843年）以降，決定的影響をもたらした，と述べている。

1810：13番「おろか者」"Dümmling" この話はヴィルヘルムの筆跡で書かれているが，1812年版では64番のⅢの注に入っただけである。

1810：17番「三人の王子」„Die drei Königssöhne" これはヴィルト家の誰かの話をヴィルヘルムが聞き書きしたもの。1812年版では64番「おろか者のこと」"Von dem Dummling" のⅢとして入ったが，1819年版からは，63番にはドロテーア・フィーマンの話「三枚の羽根」が入り，64番には1812年に64番のⅣだった「金のがちょう」が入る。

1810：25番「王女と魔法をかけられた王子。蛙の王さま」„die Königstochter und der verzauberte Prinz. Froschkönig" ヴィルヘルムが，おそらくヴィルト家の誰かの口伝えしたものを聞き書きした。1812年版以降，つねに1番におかれている。「蛙の王さま，または鉄のハインリヒ」„Froschkönig oder der eiserne Heinrich" 蛙のいう詩形のせりふ「王女さま，末の方……」は，フリードリヒ・ダヴィド・グレーターが，その雑誌ブラグール Bragur (Ⅲ，1794. 241ページ以下) で，また，アヒム・フォン・アルニムとクレメンス・ブレンターノが，「少年の魔法の笛」„Des Knaben Wunderhorn" の「わらべ歌の付録」のなかで，同じ形で発表している。この話がつねに1番に位置されたのは，ドイツでもっとも古い話のひとつと考えられたからである。つまり，ゲーオルク・ロレンハーゲン Georg Rollenhagen が，1595年に出版した作品「蛙のちび助」"Froschmeuseler" において，「文字に書かれず，つねに口伝えで後世に伝えられたふしぎなおとぎ話」としてあげたなかに，「鉄のハインリヒ」の話があったからである。

第1章のまとめ

以上の諸話を，保持された度合いによって分類すると，次の如くである。まず分類規準とその記号を明らかにしておく。

A　なんら手を加えられず，最初の聞き書きのまま1857年版まで保持されたもの。

B　手は加えられたが，1857年版まで保持されたもの。

C　手を加えられたが，1819年（第2）版では姿を消したもの（1812年版までしか採録されなかったもの)。

D　1812年(初)版に採録されなかったもの。

E　本文にも注釈にも記録されていないが，1812年版の本人使用本に名がメモとして記されているもの。

以上のうちC，Dのばあいには，注釈書に入れられたものもある。

各節で述べた語り手たちのレパートリーをこの規準で分類すると，以下の如くである。主人公と話の結末も付記し，誰の話と交代したか，も付記することとする。

ドルトヒエン

1810：44「煙突掃除夫のふたりの息子」C　1819年版でハクストハウゼン家

の話と交代。男の子と金細工師。

1810：35「ねずみ皮の王女」C　1819年版ではフィーマンの話と交代。末娘と父王。塩の如く。

1812：13「森の3人のこびと」C　1819年版からはフィーマンとアマーリエの話の合成話と交代。男のこびと。

1812：24「ホレ婆さん」B　1819年版で，ゴールトマンの話と結合。まま娘。ホレによる幸せの獲得。

1812：28「歌うがい骨」B　1819年版から兄弟の数が2となる。若者。弟殺し。

1812：34「ハンスのトリーネ」C　フィーマンの話と交代。若いなまけ者の妻の破滅。

1812：36Ⅲ「テーブルよ……」C　1819年版では1812年版で36だったジャネットの話が36となる。若者，冒険譚。

1812：39　Ⅰ，Ⅱ。Ⅲ「こびとたち」B，こびと，くつ屋，女中，若い妻。

1812：46「フィッチャー鳥」B　ただし1812年版からすでにフリーデリケ・マンネルの話との合成。娘，魔法使いで賊。

1812：49「六羽の白鳥」　B　6人の兄と妹，魔女であるまま母。

1812：55「ルンペルシュティルツヒェン」B　1812年版ですでにハツセンプフルークの誰かの話との合成。娘。

1812：56「いとしいローラント」B　まま娘と恋人。結婚。

1812：65「千まい皮」B　王女。父王からの求婚。王との結婚。

1812：76「なでしこ」E　メモとして名がでるだけ。

1815：2「歌いおどるひばり」B　ジーベルトの話もとり入れてある。末娘。再発見で結婚。

1815：16「みそさざいとくま」E　フィーマンの語った「みそさざいとくま」は1857年版まで保持されている。

1815：19「ひきがえるの話」Ⅰ　E　妹リゼットの話との合成。子ども。死。

グレートヒエン

1810：2「ねことねずみのこと」B　ねことねずみ。

1810：4「まごころのある名付親すずめ」　B　1819年以降，フィーマンの話の方が中心になって再構成。すずめ。仇討ち。

1810：16「白いはと」C　ハツセンプフルークの誰かの話と交代。末の王子

＝親指小僧。結婚。

1810：30「盗まれたお金」C　ハクストハウゼンの誰かの話と交代。死んだ子。

1810：34「マリアの子」B　娘。

1810：45「白鳥王子」C　「鉄のストーブ」と交代。娘と呪われた王。結婚。

1812：4「ボーリングとトランプ遊び」E　貧しい若者。王女と結婚。

1812：16「たちまちさん」E　兵隊あがりの男。

1812：30「しらみとのみ」E　しらみとのみ。

1812：34「ハンスのトリーネ」E　(1819年版からはフィーマンの話が入る)おろかな若い妻。

リゼッチ

1812：41「コルベスさん」B　にわとり，猫　　など。

1812：55「ルンペルシュティルツヒェン」B　粉屋の娘，こびと。名当て。

1815：19「ひきがえるの話」I　B　はじめからリゼツテとドルトヒェンの合成。子ども，死。

ミー

1812：44「死に神の名付親」B　1819年版から終結部にシリングの物語を使ってある。12人の子持ち男，死に神。

ヴィルト夫人

1810：3「しらみとのみ」B

1810：5「わらと炭と豆の話」B　1837年版以来イソップにより手入れ。わら，豆，炭。

1812：19「漁師とその妻」D　注釈に。

1812：47「ねずの木の話」E　子ども，死からの再生。

ヴィルト家の誰かからの話

1810：11「兄と妹」B　ヘンゼル，グレーテル。魔女。

1810：13「おろか者」D　1812年版，64Ⅲの注。

1810：17「白人の王子」C　1819年版でフィーマンの話と交代。

1810：25「王女と魔法をかけられた王子，蛙の王さま」B　王女，蛙姿の王

子。結婚。

こうしてヴィルト家の人びとの語った話をまとめてみると，Aの分類に入れられるべきものはない。たしかに，45年間に及ぶ改版の歴史のなかで，何も手入れされないということはありえないだろうから，Aはどの語り手についても存在しない，ということになるだろう。それにしてもBでさえ，あまり多くはない。

ドルトヒエン　17話中　B＝10，C＝5，E＝2

グレートヒエン　10話中　B＝3，C＝3，E＝4

リゼッテ　3話中　B＝3

ミー　1話中　B＝1

ヴィルト夫人　4話中　B＝2，D＝1，E＝1

ヴィルト家の誰か　4話中　B＝2，C＝1，D＝1

ヴィルト家の人たちは，グリム兄弟にとって最初からの語り手であり，親しい間柄であったが，意外にC，D，Eに該当する話が多いことが注目される。他方，Bのうち，のちに特に有名になった話がいくつかある。55番「ルンペルシュティルツヒエン」11番「ヘンゼルとグレーテル」25番「蛙の王さま」である。しかし，それらも，1812年版はもちろんのこと，版を重ねるに従って，グリム兄弟（主としてヴィルヘルム）により文章が磨かれていった。（この証明には紙数が必要なので，別の機会にゆずる。）しかし第二章で扱うハツセンプフルーク家の娘たちのレパートリーと比較すると，語った話の総数と代表的な話との比は少い。ここでは全22話中，代表的な話となったものは3話である。

話の主人公と話の結末という観点からみると，王女(娘)と王子(若者)との結娘というタイプの話が意外に少いことに気づく。列挙すれば次の通りである。

マリー

1812：56「いとしいローラント」まま娘と恋人。

1812：65「千まい皮」王女と王。

1815：2「うたいおどるひばり」末娘と王子。

グレートヒェン

1810：16「白いはと」王子と呪われていた王女。

1810：45「白鳥王子」娘と呪われていた王。

1812：4「ボーリングとトランプ遊び」貧しい若者と王女。

ヴィルト家の誰かからの話

1810：25「王女と魔法をかけられた王子，蛙の王さま」王女と呪われていた王子。

これはヴィルト家の全話数22のうちの7話，31.8%であり，第2章で扱うハッセンプフルーク家のばあいと比較すると少いことがわかる。そして一方では，この家族の話のなかには，男の子やこびとの話，若者の冒険譚などが多く，あるいは動物の話や死んだ子の話さえあることが注目される。ハッセンプフルークの姉妹と友人関係にあり，グリムの家に集って語りあったとはいえ，家柄の影響があったことがよみとれる。しかも，B群に属するものが少いことを考えると，KHMの性格が，蒐集活動の初期に，すでにある程度規定されていたことがわかるのである。

第2章　ハッセンプフルーク家の人びと

父親はヨハネス Johannes (1755～1834) ドールハイム Dorheim 生れ。ヘッセン選帝侯の官吏で，のちに政府首相となった人。母親はマリーア・マグダレーナ・ドレーゼン Maria Magdalena Dresen (1767～1840)。彼女の実家はドルーム Droume。ドフィネ Dauphiné のユグノー派の家庭で，まったくフランス風の精神で教育されていたということである。そして1880年頃にも，ハッセンプフルーク家の食卓では，フランス語で会話がなされていたということである[2)]。

一家はグリム一家がかつて住んでいたハーナウ Hanau に住んでいて，1799年にカッセルへ移住してきた。長女はマリー Marie (1788年12月27日，アルテンハースラウ生れ，1814年フォン・ダルヴィク von Dalwigk と結婚。1856年11月10日没) 次女はジャネット Jeanette(Johanna Isabella 1791年6月28日ハーナウ生れ，1860年6月12日没)，長男ハンス・ダニエル・ルートヴィヒ Hans Daniel Ludwig (1794年生れ，1862年没)，三女アマーリエ Amalie (1800年1月30日カッセル生れ，1871年7月11日没)。

ハンス・ルートヴィヒは思い出を次のように記している。「1808年頃，一番上の姉マリーがエンゲルハルト家の娘たちとつきあうようになってから，両親の家での従来の日常の話題が大きく変ったのを，私は経験した。マリーはエンゲルハルト家で，ヤーコプ・グリムとその弟ヴィルヘルムと知り合いになった。ゲーテとあらゆる精神的運動への興味，そしてまたメルヒエンと古いドイツのポエジーへの興味が家庭内の会話の話題として登場してきた。そうするう

ちに，姉マリーのゆるやかだったつきあいがりっぱな冠のようになり，そのグループには，エンゲルハルトの姉妹の他に私の姉のマリーとヨハンナ，それにグリム兄弟の妹ロッテが属するようになった。そしてグリム兄弟の孤立した立場にかんがみ，集りはいつもマルクト通りのヴィルト家の薬局の隣りのグリムの家で開かれ，とても楽しい晩をすごしたものだ。」[3]

ハインツ・レレケは，メルヒェン集の本人使用本に「ハツセンプフルークの人びとから」と書いてあるのは，ここに記されているような数人の集りで語られたことを示すのであろうと述べている[4]。グリム兄弟自身の著した注釈書(1822年）には，話の出所として，「マイン河地方から」とか「ハーナウから」「ヘッセンから」というように，いろいろな書き方をしている。ハーナウもヘッセンなのであるし，ハーナウからカッセル（やはりヘッセン）に移住してきて，そこで語っていることを思えば，これらは混乱しているように考えられる。この点について，レレケは，そういう集りで，子どもの頃聞いた話を思いだしたばあいに「マイン河地方から」とし，カッセル近郊で聞いた話は「ヘッセンから」としたのではないかと推測している。

1810年までは，これらの語り手の話を記録したのは主としてヤーコプだった。1809年9月3日，ヤーコプはヴィルヘルムにあてて手紙を書いている。「ぼくは最近エンゲルハルトの娘さんと知り合いになった。彼女は多くは知らないが，彼女を通して知ったハッセンプフルークの娘さんたちがぼくに，全く新しい話をいくつか語ってくれた（彼らのことはその他の点でも，ぼくは気にいったが)。それに，もっとよく考えて，思いだしてみるということだ。」[5]

のちにヴィルヘルムは弟のフェルディナントに次のような手紙を書いている。「ハッセンプフルークの人びとは，一番よく知っている人に属する。そしてぼくはもっとうながしてみるつもりだ。小さなアマーリエも，もうよく語ることを心得ているし，頭がいい。あの家族はみんなそうなんだが。だがすこし，漫画的な，こなまいきなところもあり，どうもうまくないのだが。」

長女のマリーはグリム兄弟と知り合いになって，1808年からメルヒェンを語って聞かせ始めた。当時は主としてヤーコプが記録したのだが，1810年以降はヴィルヘルムが記録したようである。1810年2月，ヴィルヘルムはフリーデリケ・マンネルあてに，次のような手紙を書いている。「この手紙をとどけてくれるのが，もしハツセンプフルーク嬢ならば，彼女は夏に，健康回復のため御地に滞在したいと考えています。あなたはきっと彼女のことが気にいるでしょう。彼女は本質的に，どこかかわいらしくて，りこうなところがあります。そ

して，彼女が言ったところでは，たしか，テオバルトと親戚です。ぼくは彼女にもメルヒエンをお願いしました。もしあなた方がふたりでいっしょうけんめい集めたら，文句なしでしよう。」

マリーはたしかに病弱だったようである。そして，1814年1月18日，ヴィルヘルムはヤーコプにこう書き送っている。「マリーは，婚約者の将校が戦場へ出発する前に結婚式をあげるそうです。彼女のことが気の毒でなりません。そして，会うたびにぼくはびっくりしてしまいます。」

このマリーが語った話が，ヘルマン・グリム Herman Grimm（ヴィルヘルムの息子）の発言以来，ヴィルト家の家政婦マリー・ミュラー Marie Müller（1747～1826）の話であるとされてきた。しかしハインツ・レレケはその誤りを指摘し，十分な根拠によって，マリー・ハッセンプフルークであることを証明した。その論文はすでに日本語訳で紹介されているので[6]，ここではレレケの説に従って，マリーはハッセンプフルークの長女のことであるとして論述を進める。

第1節　マリー

1788年12月27日アルテンハースラウ Altenhaßlau 生れ，1814年 von Dalwigk と結婚。1856年11月10日没。

1810：14番「仕立屋の親指小僧」"Vom Schneiderlein Daümerling" マリーの語りをヤーコプが聞き書きしたもの（「マイン地方から」）。1812年版では45番を与えられ，「仕立屋の親指小僧の旅」"Des Schneiders Daumerling Wanderschaft" となる。その際，「ジャガイモが多すぎて……」のせりふがつけ加えられた。1812年12月31日付のアルニムあて書簡によれば，「これはこの話の中でなく，独立に，ある女中さんから聞いたものである，」とのことである。1819年版では，ヘッセンとパーデルボルンの二つの要素と合成され，そのまま1857年版まで保持された。主人公は仕立屋の息子。冒険譚。

1810：19番「いばら姫」"Dornröschen" マリーがカッセルで語ったものをヤーコプが聞き書きした（「ヘッセンにて」）。1812年版から50番の位置を占める。その後の版においてヴィルヘルムは，ペローの「いばら姫」"La belle au bois dormant"（1697年）にならって整えている。しかし，ヤーコプの聞き書き自体，すでに，ペローの話とは重要な点で一致していた。1857年版まで保持。王が国中のあらゆる紡錘を焼き捨てさせるモティーフは，ルートヴィヒ・ウーラント Ludwig Uhland のバラード「メルヒエン」"Märchen" からの借

用である。主人公は姫。眠りの後の結婚。

1810：41番「盗賊婿」“Raüberbraütigam” マリーの語りをヤーコプがカッセルで聞き書きしたもの。1812年版では40番の位置を占め，1857年版まで保持されている。

それは「マイン地方から」と記されているので，マリーがハーナウにいた頃聞いた話として語ったものと思われる。しかしそれは完全な話とはいえず，1819年版では，「ニーダーヘッセンから」とされる二つの話と合成された。この書き方は，ヤーコプの他の例から推察するに，おそらくカッセルで聞き書きしたものであろう。その語り手の特定はできていない。主人公は娘，敵対者は盗賊婿。

1810：47番「水の精」“Wassernix” マリーがカッセルでハーナウ時代を思いだして語ったものをヤーコプが聞き書きした（「ハーナウより」）。1812年版では少し手を入れられて79番となる。1857年版まで保持されている。主人公は男の子と妹。

1810：43番（ハッセンプフルーク家の人，多分マリー）「白雪姫」„Schneeweißchen” ヤーコプは1808年4月，ザヴィニーあてに自筆の聞き書きの「白雪姫」を送っている。そして，1810年，ブレンターノに送った原稿のなかには，多少手入れした話が43番に含まれていた。これはハッセンプフルーク家の人によるもので，多分マリーと考えられる。1812年版では53番となった。このばあいには終結部が，トライザのフェルディナント・ジーベルトの話によって変えられた。1819年版では，白雪姫の生き返りのきっかけが，フランクフルトのハインリヒ・レーオポルト・シュタイン Heinrich Leopold Stein から寄せられた話によってつくりかえられた。1857年版まで保持されている。主人公は娘。殺されたのち結婚。

1812：1番「蛙の王さま，あるいは鉄のハインリヒ」“Der Froschkönig oder der eiserne Heinrich” 1813年3月8日，マリーはカッセルで，「蛙の王子」“Der Froschprinz” を語り，それは1815年版の13番として採用されたが，のちに，1番の注釈に入れられた。1857年版まで保持された話は，既述の如く，ヴィルト家の誰かが語ったものに手を入れた話である。主人公は王女と呪われていた王子。結婚。

1812：11番「兄と妹」“Brüderchen und Schwesterchen” 1811年3月10日，マリーが語ったもの。1819年版では，やはり1813年3月8日にマリーが語った，もっと大きな話と合成され，1857年版まで保持されている。ともに，「マ

イン河地方より」とメモが付けられているので，マリーが子どもの頃聞いた話と思われる。主人公は兄と妹。呪いののち結婚。

1812：31番「手なし娘」"Mädchen ohne Hände" 1811年3月10日マリーが語ったもの（「ヘッセンより」）。1819年版では1813年8月27日にドロテーア・フィーマンが語ったもの（「ツヴェールンより」）と合成。1857年まで保持されている。主人公は粉屋の娘，敵対者は悪魔。王子と結婚。

1812：75番「フェニックス鳥」"Vogel Phönix" 1812年2月10日，マリーがこの話を仲介してグリム兄弟に提供した。主人公は少年。援助者はフェニックス鳥。1819年版で消え，グリム兄弟自身による注釈書に入れられた。1819年版からは，ドロテーマ・フィーマンの「ツヴエールンより」とメモされた「三本の金髪をもった悪魔」"Der Teufel mit den drei goldenen Haaren" が採用された。それは1857年版まで保持されている。

1812：81番「かじ屋と悪魔」"Der Schmidt und der Teufel" この話の語り手は未詳であるが，1812年版の本人使用本には，マリー・ハッセンプフルークの名がメモされている。1812年12月1日とのことである。主人公はかじ屋と悪魔。1819年版では「陽気な兵隊」"Bruder Lustig" と入れかわり，これは，82番の注釈に入れられた。「陽気な兵隊」の話者は不明だが，1857年版まで保持された。

1812：85番b「王女のしらみ」"Prinzessin mit der Laus" 1811年4月18日マリーが語ったもの。1819年版では消え，85番には，1812年版で63番だった「金の子ら」"Goldkinder" が入った。語り手はフリーデリケ・マンネル Friederike Mannel。主人公は王女としらみ。なぞ話。

1815：70番「黄金のかぎ」"Der goldene Schlüssel" 1813年5月マリーが語ったもの（「ヘッセンより」）。1815年版にはじめて収められて以来，その後の版でもつねに全巻の最後を飾っている。1819年版：161番，1837年版 168番，1840年版 178番，1843年版 194番，1850年版 200番。

1812：26番「赤ずきん」"Rotkäppchen" ここには二話が収められており，第1話はジャネット・ハッセンプフルークによる。第2話がマリーの話で，1812年秋カッセルで語られた（「マイン河地方より」）。1857年版まで保持されているが，ハインツ・レレケによれば1857年版の話には，1800年に発表されたルートヴィヒ・ティーク Ludwig Tieck のメルヒエンドラマ「小さな赤ずきんの生と死」"Leben und Tod des kleinen Rotkäppchens" のいくつかの要素の影響がみられるとのことである。

第2節　ジャネット

1791年6月28日ハーナウ生れ，1860年6月12日没。

1810：51番後「コルベスさん」“Herr Korbes” これはジャネット自筆の原稿である。1810年11月。つまり，ブレンターノへの原稿送付は10月25日であったから，ジャネットの自筆原稿はそれ以後にグリム兄弟の手に入り，追加してブレンターノに送られたのである。従って51後という番号になる。(「マイン河地方より」)。1812年版からは41番。1857年版まで保持されている。

1812：14番「ラプンツェル」“Rapunzel” この話の語り手は未詳だが，1812年版のグリム本人使用本には，ジャネットの名がメモされている。「ラプンツェル」はフリードリヒ・シュルツ Friedrich Schultz (1762～1798) の『短篇小説集』“Kleine Romane” の第5巻 (1790年，ライプツィヒ) の話にもとづいている。ところがシュルツの話はフランスのマドモアゼル・ド・ラ・フォルス Mlle de la Force の「ペルジネット」“Persinette” に由来する。ヤーコブが，たいへん短縮された話に手を入れ，ヴィルヘルムは兄によって手入れされたものをのちの版で，再び大幅に手入れした。主人公は姫と王子。災いを排除して結婚。

1812：26番「赤ずきん」“Rotkäppchen” ここには上述の如く2話が収められており，その第1話はジャネットが寄せたものである。(第2話は姉のマリー) 1812年秋，カッセルにおいてであった。(第1節マリーを参照)

1812：33番「長ぐつをはいた猫」“Der gestiefelte Kater” この話は1812年秋，ジャネットがカッセルで語ったもので，1812年版にはこの位置に収められたが，シャルル・ペローの「長ぐつをはいた猫」“Chat botté” によることが余りに明白であったため，1819年版では削除された。1812年版の注釈において，すでに，グリム兄弟はペローとの類似を意識していた。注釈には次のように記されている。

「このメルヒエンは，もっとも有名で，もっとも広く知られているもののひとつである。ペローは，彼の chat botté のなかで，よく語っている。しかし，バジーレはイタリアのいろいろ違いのある伝説をうまく使っている。ペンタメローネ Pentamerone II，4。そこでは息子はふたりしかいない……」[7]。

1812：36番I「テーブルよ食事の用意，金ひりろば，こん棒よ袋の中へ」“Von dem Tischlein deck dich, dem Goldesel und dem Knüppel in den Sack” 1812年秋，ジャネットがカッセルで語ったもの。(「ヘッセンより」) ただしこれは，ヘンシェルの「こうのとり老嬢」の話を下敷きにしているとのことであ

る。1857年版まで36番で保持されている。

1812：66番「フルレブルレブッツ」"Hurleburlebutz" 1812年9月29日，ジャネットがカッセルで語ったもの。彼女はこの話を子どもの頃ハーナウで聞いたとのことである。1819年版では削除され，多分ハンス・ルードルフ・フォン・シュレーター Hans Rudolf von Schröter から寄せられた「うさぎの花嫁」"Häsichenbraut" と交代した。主人公は呪われて狐になっていた王子。王女と結婚。

1812：67番「王さまのライオン」"Der König mit dem Löwen" 1812年夏，ジャネットがカッセルで語ったもの。(「ヘッセンより」)。1819年版からは「12人のかりゅうど」"Die zwölf Jäger" と題名が変更されたが，内容はほとんど不変。1857年版まで保持されている。主人公は忘れられた王女。王子と結婚。

1812：70番「オーカーロー」"Der Okerlo" 1812年版のグリムの本人使用本には，70番に対してジャネットの名がメモとして記されているが，詳しいことはわからない。主人公は捨てられて人喰いに嫁がせられる王女。呪的逃走。恋人である王子と結婚。

1819年版ではハクストハウゼン家の手を経て寄せられたパーデルボルン地方の話「三人の幸運児」"Die drei Glückskinder" と交代。それは1857年版まで保持された。

1812：76番「なでしこ」"Die Nelke" 1812年9月29日，カッセルでハッセンプフルーク家の誰か，多分ジャネットが語ったもの。1819年版では同名だがドロテーア・フィーマンが語った話（「ツヴェールンより」）と入れ替えられ，1857年版に至る。主人公は奪われた王子とかりゅうどの娘。敵対者は庭師。ふたりの結婚。

第3節　アマーリエ

1800年1月30日生れ，1871年7月11日没。

1810：9番「血入りソーセージ」"Blutwurst" ヤーコプの手による聞き書きで，多分アマーリエによるものと思われる。1812年版では43番「ふしぎなもてなし」"Die wunderliche Gasterei" となるが，内容は多少手が入れられた程度。しかし，第3版（1837年）では，43番に「トルーデおばさん」"Frau Trude" が入り，これは消えた。トルーデの話は，1823年に出版されたマイヤー・テディ Meier Teddy の詩「小さないとことトルーデおばさん，うばのおとぎ話」"Klein Bäschen und Frau Trude, Ammenmärchen" による話である。

1812：13番「森の三人のこびと」"Die drei Männlein im Walde" これは上述の如く，ドルトヒェンが寄せたものだが，1819年版からは，ドロテーア・フィーマンの話とアマーリエの話を加えて合成された。アマーリエの話に，口から蛙がとびだすモティーフがあった。1857年まで保持されている。主人公はまま娘。王と結婚。

1812：17番「白い蛇」"Die weisse Schlange" 1812年秋，ハッセンプフルーク家の誰かが語ったものだが，1812年版のグリムの本人使用本にはアマーリエの名が記されている。「ハーナウより」とあるので，アマーリエが子どもの頃ハーナウで聞いたものであろう。1857年版まで保持されている。主人公は召使い。白蛇を食べたため動物のことばがわかる。王女と結婚。

1812：20番Ⅱ「勇敢な仕立屋」"Von einem tapfern Schneider" 1812年2月10日，ハッセンプフルーク家の誰か，おそらくアマーリエがこの話を寄せた。(「ヘッセンより」)。1819年版ではもうひとつの「ヘッセン」の話(語り手不明）と合成され，1812年の20番Ⅰであったマルティヌス・モンターヌス Martinus Montanus の話（1557年頃のもの）に手入れしたものも加えて，同名の話とした。1857年版まで保持されている。仕立屋の若者。

1812：29番「三本の金髪をもった悪魔」"Von dem Teufel mit drei goldenen Haaren" 1812年秋，カッセルでアマーリエが語ったもの。（「ニーダーヘッセンより」)。これは本来の話の後半部しか含んでいない。1819年版からは，ドロテーア・フィーマンの語った話（「ツヴェールンより」）が29番に入った。主人公は若い木こり。王の難題を解決して王女と結婚。

1812：42番「名付親殿」"Der Herr Gevatter" 1812年2月10日にアマーリエが語ったものを，同年9月12日になって書きつけたもの。第3版（1837年）では，ルートヴィヒ・アウアーバッハ Ludwig Aurbach の「青少年のための読みもの」"Büchlein für die Jugend"（1834年）に従って補足している。そして1857年版まで保持されている。

第4節　ハッセンプフルーク家の誰かから寄せられた話。(聞き書きはすべてヤーコプによる)。

1810：21番「つぐみひげの王さま」"König Drosselbart"「マイン河地方から」というメモがあるので，ハッセンプフルークの誰かがハーナウ時代に聞いた話を語ったものと思われる。1812年版では，ドルトヒェンがカッセルで語った話の終結部を使って補足している。つぼをこわし，妻に恥をかかせたのがつ

ぐみひげの王自身だったという部分である。1819年版ではさらに，パーデルボルンの話，おそらくルドヴィーネ・フォン・ハクストハウゼン Ludowine von Haxthausen の話によって補足している。そして，1857年版まで保持されている。主人公は王女。相手はつぐみひげの王。結婚及びそれ以降のこらしめ話。

こらしめ話の部分はヤーコプの筆跡ではあるが，ハッセンプフルーク家の人の話であるかどうか，確定的ではない。

1810：6番「狼」"Der Wolf"「マイン河地方より」というメモがあり，ハッセンプフルークの誰かの語ったものと考えられる。1812年版からは5番となり，題名も「狼と七匹の子やぎ」"Der Wolf und die sieben jungen Geißlein" となった。1810年のヤーコプの聞き書きに，フランス語のせりふがあるが，これはユグノー派の子孫であるこの家の人が記憶していたものであろう。1857年版まで保持されている。主人公は子やぎ。敵対者は狼。

1810：12番「親指小僧」"Daümling" これはごく短いメモにすぎず，「兄と妹」と関係があることも記されている。そして1812年版では15番「ヘンゼルとグレーテル」の注釈の中で，ヘンゼルが親指小僧だったという話もあると紹介されているにすぎない。主人公は親指小僧。

1810：15番「おろか者」"Dummling" 末尾に「口伝え」のメモがある。ごく短いすじ書きである。1812年版では，64番「おろか者のこと」の注で紹介されているにすぎない。

1810：27番「金のがちよう」"Goldne Gans" 末尾に「口伝え」と記されている。1812年版では64番「おろか者」の第4話として採録されたが，1819年版からは64番として独立に，「金のがちょう」"Die goldene Gans" という題名を与えられた。「パーデルボルンより」と記された，おそらくハクストハウゼン家から寄せられた話と合成されている。

1810：29番「ヘンデ氏」"Herr Hände" これは相手をだましては金をまきあげていく男の話だが，1812年版では61番「たちまち金持ちになった仕立屋」"Der Schneider, der bald reich wurde" の注釈の中で紹介されているにすぎない。1812年の61番は，1811年4月18日にハッセンプフルークの誰かがカッセルで語ったものである。1819年版で，ドロテーア・フィーマンの語った話(「ツヴェールンより」) にとって代わられ，1857年版に至る。

1810：32番「金のおじか」"Goldner Hirsch" カッセルでヤーコプが，ハッセンプフルークの誰かから聞き書きした断片である。1812年版では11番「兄と妹」の注釈において紹介されたにすぎない。その11番は1811年3月10日にマリ

ー・ハッセンプフルークが語ったものである。

1810：39番「よい膏薬」"Das gute Pflaster" 末尾に「断片」のメモがあり1812年版では85番「断片集」のd）として入れられている。そして末尾に「あまり価値がない」とメモが記されている。1819年版から削除された。主人公はおろかな娘。だましたユダヤ人をしまいにはむちで打って殺す。

1810：40番「三羽のからす」"Die drei Raben" ここには，ヤーコプがハッセンプフルークの人から聞き書きした二話が記録されている。(「マイン河地方より」)。その第2話は注釈においては，「ハーナウより」とされているので，娘のうち誰かが子どもの頃聞いたものを語ったのであろう。第1話が1812年版では25番「七羽のからす」として独立した。その導入部は，1819年版において，ヤーコプがウィーン会議出席の際，1815年に手に入れたもので補足してある。それはアンドレアス・シューマッハー Andreas Schuhmacher によって再話されたものであったらしい。

1812：54番「おろか者ハンス」"Hans Dumm" 1812年9月29日。ハッセンプフルーク姉妹の誰かがカッセルで語ったもの。マリー・ハッセンプフルークはもうひとつ別の話を1812年10月13日に寄せてきたが，採用されなかった。この話は1812年版のみで削除された。クリストフ・マルティン・ヴィーラント Christoph Martin Wieland が "Prevonte oder Wünsche" という題で1778～1779 年にこれと同じタイプのメルヒェンをフランス語の話から再話している。そのために1819年版には入れられなかったのであろう。

1812：61番「たちまち金持ちになった仕立屋の話」"Von dem Schneider, der bald reich wurde" 1811年4月18日，カッセルでハッセンプフルークの誰かが語ったもの。1819年版で，ドロテーア・フィーマンの語った話（「ツヴェールンより」）にとって代わられ，注釈の中に入れられた。主人公は仕立屋。人をだまして金持ちになる。

1812：84番「おしゅうとさん」"Die Schwiegermutter" 1811年4月18日にハッセンプフルークの誰かが語ったものだが，話の後半が欠けた断片で，グリム兄弟自身が，すじを補っている。主人公は若い王女。敵対者は女王。1819年版では採録されず，84番には「ハンスが結婚する」"Hans heiratet" が入り1857年版まで保持された。それは，1667年にライプツィヒ Leipzig で出版されたヨハネス・プレトーリウス Johannes Praetorius の「魔法のむち」"Wünschelruthe" からとったものである。

第2章のまとめ

マリー

1810：14「仕立屋の親指小僧」B　若者。冒険譚。

1810：19「いばら姫」B　王女。結婚。

1810：41「盗賊婿」B　娘。盗賊婿。捕えられる。

1810：43「白雪姫」B　王女。結婚。

1810：47「水の精」B　男の子と妹。水の精の手から逃れる。

1812：1「蛙の王さま」B　王女と呪われていた王子。結婚。

1812：11「兄と妹」B　兄と妹。妹は王と結婚，兄も幸せにくらす。

1812：31「手なし娘」B　娘。結婚。

1812：75「フェニックス鳥」C　ドロテーア・フィーマンの「三本の金髪をもつ悪魔」と交代。

1812：81「かじ屋と悪魔」C　「陽気な兵隊」（語り手不詳）と交代。

1812：85b「王女のしらみ」C　フリーデリケ・マンネルの「黄金の子ら」と交代。

1815：70「黄金のかぎ」B　若いきこり。

1812：26「赤ずきん」B　娘。

ジャネット

1810：51後「コルベスさん」B　にわとり，ねずみ，ねこ，うす，たまご，あひる，とめ針，ぬい針。

1812：14「ラプンツェル」B（但し名前のメモだけ）娘。結婚。

1812：26「赤ずきん」C　1819年版からはマリーの話が独立に26番となった。娘。

1812：33「長ぐつをはいた猫」C　猫と男の子。結婚

1812：36I「テーブルよ…」B　仕立屋の3人息子。修業譚。

1812：66「フルレブルレブッツ」C　シュレーターの「うさぎの花嫁」と交代。王女と呪われた狐（王子）。結婚。

1812：67「王さまのライオン」B（題名変更）王女。結婚。

1812：70「オーカーロー」C　ハクストハウゼン家の「三人の幸運児」と交代。王女。王子と結婚。

1812：76「なでしこ」C　ドロテーア・フィーマンの同名の話と交代。王子

とかりゅうどの娘。結婚。

アマーリエ

1810：9「血入りソーセージ」C（第3版で削除）1823年刊の本からの話と交代。血入りソーセージとレバーソーセージ。

1812：13「森の3人のこびと」B　まま娘。結婚。

1812：17「白い蛇」B　召使い。王女と結婚。

1812：20Ⅱ「勇敢な仕立屋」　B　仕立屋。

1812：29「三本の金髪をもった悪魔」C　若い木こり。王女と結婚。

1812：42「名付親殿」B　貧しい男。

ハッセンプフルーク家の誰か。

1810：21「つぐみひげの王さま」B　王女。王と結婚。それ以降のこらしめ話。

1810：6「狼」B　子やぎ。狼の難。

1810：12「親指小僧」D　親指小僧。

1810：15「おろか者」D　おろか者。

1810：27「金のがちょう」B　ぬけさく。王女と結婚。

1810：29「ヘンデ氏」D　うそつき男。

1810：32「金のおじか」D　兄と妹。

1810：39「よい膏薬」C　おろか娘。

1810：40「三羽のからす」B（「七羽のからす」として）娘と兄たち。救済。

1812：54「おろか者ハンス」C　おろかな若者。王女と結婚。

1812：61「たちまち金持ちになった仕立屋の話」C　フィーマンの話と交代。仕立屋

1812：84「おしゅうとさん」C　1667年の本からの話と交代。若い王女。

さてこうして通観してみると，かなり顕著な傾向がみられる。

マリー　13話中，B＝10話，C＝3話。しかもBの10話中には，のちにKHMの代表的な話として知られるようになったものが多く含まれている。「仕立屋の親指小僧」「いばら姫」「白雪姫」「蛙の王さま」「兄と妹」「手なし娘」「赤ずきん」である。マリーがいかに重要な語り手であるかがわかる。

ジャネット　9話中　B＝4話，C＝5話

アマーリエ　6話中　B＝4話，C＝2話。

ハツセンプフルーク家の誰か　12話中　B＝4話，C＝4話，D＝4話。

ここでもB群の中には，代表的な話が含まれている。「つぐみひげの王さま」「狼」（「狼と七匹の子やぎ」）「三羽のからす」（「七羽のからす」）である。マリーのレパートリー中の重要な話と合わせると10話にものぼる。ハッセンプフルーク家の全話数40話のうち10話である。第一章のヴィルト家と比較してたいへん多い。このように代表的な話が10話もハッセンプフルークの娘たちからもたらされている以上，この家族が，16世紀のフランス・ユグノー派の子孫であり，19世紀になっても食卓の会話をフランス語でしていたという事実は，見逃すことのできないことである。

また，主人公とその結末をみても，明瞭な傾向がみてとれる。王女(娘)と王子(若者)との結婚というタイプをあげると

マリー　13話中　5話。

ジャネット　9話中　6話。

アマーリエ　6話中　3話。

ハッセンプフルーク家の誰か　12話中　3話。

語り手が娘たちであれば話題が結婚に向くことは自然ななりゆきであろう。これはハッセンプフルーク家の語った全話数40話のうちの17話，42.5％である。この数字は第1章で扱ったヴィルト家のばあいと比較すると約10％も多いことになる。当時，大臣をだしたような上流家庭の娘たちの好みが明瞭に表われており，それがKHMの性格に大きな影響を与えたことがわかる。

薬屋といい，大臣をだした家庭といい，カッセルの上流階級であることは同じで，しかも両家の娘たちの語ったものである点も同じである。しかしそれでも，話の内容に微妙な差異のあることがうかがわれる。ここでは，全体的レパートリーとの関連で調べているので，話の主人公と話の結末のみをとりあげているが，その点について，上述の両家のB群の話を通観してみると，その差異はいっそう明らかになるのである。

〔註〕

1) Heinz Rólleke: Die älteste Marchensammlung der Brüder Grimm, 1975 Cologny-Genève
Brüder Grimm: Kinder-und Hausmärchen Bd. 3, hrsg. Heinz Rölleke, 1980, Reclam

2) Rolf Hagen: Zeitschrift für deutsche Philologie 74, 1955, S. 409
3) Ludwig Hassenpflug: Mein Leben bis zum Regierungsantritt des Kurfürsten Wilhelm II (これの原文は紛失しており，写しが Nora Hassenpflug によって作られ保管されている)。
4) Heinz Rölleke: Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm, 1975 Cologny-Genève p. 391
5) Briefwechsel zwischen Jacob und Wilhelm aus der Jugendzeit. hrsg. Wilhelm Schoof. Weimar 1963. p. 152
6) 「『マリーばあさん』の『きっすいにヘッセン』のメルヒェン」『現代に生きるグリム』(岩波書店，1985年) 所収 p. 259～p. 289
7) Die Kinder-und Hausmärchen der Brüder Grimm, vollständige Ausgabe in der Urfassung, hrsg. Friedrich Panzer, Emil Vollmer Verlag, Wiesbaden p. 300